権利や資格ではなく、愛がある

小笠原　純

奨励者紹介〔おがさわら・じゅん〕
日本キリスト教団平安教会牧師

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

（ルカによる福音書　15 章 11―32 節）

新型コロナウイルス感染症の中の出来事

5月の上旬に、私の父は天に召されました。父は元気にしていたのですが、この1年くらい新型コロナウイルス感染症の広がりの中、私は父に会いに行っていませんでした。緊急事態宣言が発令されていたので、感染拡大中の関西から県外へ移動することは、あまり良いことではないと思っていたからです。なん

とも言えず、残念な気がしています。

また、ある人は入院をしている母親に会いに行くことができず、このままずっと会えないのであれば、自宅に帰ってきてもらって治療と介護をする方が良いのではないかということで、そのようにするとお聞きしました。

私のような経験をしたという方は意外に多いのではないかと思います。親族が入院しているのに、会いに行くことができない。遠くにいるので、顔を見せに行くこともできない。そうした中、遠くの国から、オリンピックのために日本へ人々がやってきます。

緊急事態宣言が継続され、関西でもなかなか新型コロナウイルス感染症は収まりをみせません。この状況で、東京オリンピックをどうするのかということが取り沙汰されています。緊急事態宣言が出されていても、東京オリンピックは行うのだというように言われています。

私はスポーツの観戦について、そんなに熱心ではありません。もちろん、世界で一番早いのは誰だろうというような個別の競技についての興味がないわけではありませんから、全く観ないというわけでもありません。日本の選手が金メダルを取ったら、小躍りするようなことはないですが、それでも「ああ、一生懸命がんばって、金メダルが取れてよかったね」というような気持ちにはなります。でも世の中には、スポーツ観戦好きの人は多いですから、ふつうであればやっぱり、東京オリンピックはあってほしいという人もたくさんおられるだろうなあと思います。でも、緊急事態宣言が発令されているように新型コロナウイルス感染症が収束していないのに、東京オリンピックを行うのかと思うと、なんだか私たちの国は、どうも私たちのことをあまり大切に考えてくれていないのではないかと思えます。

4月の上旬に、日本のオリンピック出場選手に優先的に、新型コロナウイルス感染症のワクチンを打ったらどうかという話が出ていました。オリンピック出場選手は、日本を代表してオリンピックに出場するわけだから、高齢者や病気にかかりやすい人たちよりも優先すべきであるという考え方です。「それはちょっとひどいのではないか」ということで、丸川珠代東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣は、「オリンピック出場選手へのワクチンの優先接種について全く検討していない。現時点ではもちろんだが、これから先も具体的検討を行う予定がない」と完全否定しました。でもそうした考え方が、私たちの世の中に蔓延しているのかと考えると、なんだかいやな世の中になってきたのかなあと、私はその時に思いました。

「この人は役に立つ人で、ワクチンを受ける権利があるのだ」というように言われるのは、ちょっとおかしな考え方だと思います。高齢者の人たちや病気にかかりやすい人たちよりも先に「あなたはオリンピック選手だからワクチンを打ってあげます」と言われたら、オリンピック選手も困るだろうと思いました。でも、国家の役に立つかどうかで、人間の価値を考える政治家の人たちがいますから、やっぱりオリンピック選手に優先的にワクチンを打つべきだというような決定をするかもしれません。そうした考え方はよくないということを、やっぱりいつも言い続けなければならないのだろうなあと、私はその時に思いました。しかし、6月上旬である今では、どうやらオリンピックの選手は優先的にワクチンを打つようです。「ああ、私たちの世の中はそんな感じの世の中なのか」と、とても残念な気がいたします。

放蕩息子のたとえ

今日の聖書の箇所は「『放蕩息子』のたとえ」という表題のついた箇所です。レンブラントの絵にもあり、とても有名な聖書の箇所です。

お金持ちの二人の息子の話です。弟の方がお父さんに「わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」と言いだしたので、お父さんは財産を弟と兄に分けてあげることにします。そうすると弟はその全部をお金に換えて、どこか遠くに行ってしまいます。たぶん、お父さんたちと一緒に暮らしているのが、なんだかうっとうしかったのでしょう。それでとにかく出ていってしまうわけです。でも、弟は愚かな金持ちでしかないので、ぜいたくをして全財産を使い果たしてしまいます。

弱り目にたたり目ということで、財産を全部使い果たした時に、ひどい飢饉が起こります。まあ穏やかな時であれば、どこかに転がり込むとか、どこかで雇ってもらうというようなことができたかもしれませんが、ひどい飢饉が起こったために、そうそうふつうの仕事にもつくことができません。弟は豚の世話をする仕事につくことになります。ユダヤの人々にとって、豚というのはあまり良い動物ではありません。汚れた動物であるわけです。その「豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかった」ということですから、よっぽどのひどい生活ということです。そして、だれも弟を助けてくれる人はありませんでした。

そこで弟は決心をするのです。「父のところに帰ろう。父のところにはたくさんの雇い人もいて、有り余るほどのパンもある。わたしは何も食べるものがなく、飢え死にしそうだ。息子として迎えてもらうことはできないだろうけれども、雇い人の一人くらいにはしてもらえるだろう。そうすれば食べ物だけにはありつけるだろう。そして言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と」。

弟は「もうわたしは息子と呼ばれる資格はない」と思っていました。そして、お父さんもそのように対応するだろうと思っていました。「お前にはもう財産を分けてやったし、そして自分勝手に家から出ていったんだから、わかっていることだと思うが、お前はもうわたしから息子と呼ばれる資格はない」。そのようにお父さんから言われるだろうと思っていました。しかし、お父さんの対応は弟が考えていたようなものではありませんでした。お父さんはまだ遠く離れていたのに、息子を見つけます。それはずっと息子のことを探していたということです。息子がいなくなった時から、ずっとお父さんは息子を探しているのです。今日、帰ってくるのではないか、明日、帰ってくるのではないかと、帰ってくるのをずっと待ち続けていたということです。だから、まだ遠く離れていても、息子を見つけることができるのです。そして、息子を見つけ走り寄って息子の首を抱き、息子に接吻します。さらに、僕たちに命じて、息子のために一番良い服を用意してやり、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせてやります。そして、肥えた牛を屠って、帰ってきた息子のために祝宴を開いてやります。

これだけで終われば、とても良い話であるわけですが「『放蕩息子』のたとえ」は続きます。

弟はお父さんから赦してもらい、めでたしめでたしであるわけですが、当たり前のことながら、兄はそのことを不服に思います。弟は放蕩の限りを尽くして、全財産を失って帰ってきたわけで、いわばろくでもない弟です。そんな弟が帰ってくると、お父さんは弟のために祝宴を開いてやる。兄としては納得のいく話ではないわけです。弟がいなくなったあとも、ずっとわたしは父に仕えてきた。しかし、父はわたしのために何もしてくれることはなかった。わたしが友だちと宴会を開く時も、父は何もしてくれなかった。それなのに、

弟が好き勝手なことをしてお金を使い果たして帰ってくると、祝宴を開いて歓迎している。「お父さん、どうかしてますよ。一体、どういうことですか」と、兄はお父さんに対して怒り心頭に発しているわけですが、お父さんとしてはどうもそれがよく分からないようです。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」。兄が怒っていることがとても意外だと、お父さんは兄に言うのです。

権利や資格がとわれるさみしい世界

この放蕩息子のたとえ話は、お父さんが神さまで、兄や弟が人間という、たとえです。このたとえをどういうたとえか一言で言いますと、わたしは「権利や資格ではなく、愛がある」という話だと思います。弟はお父さんに「お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」と言います。弟は「権利」の話をしているわけです。わたしには父親の財産の分け前をもらう権利がある、とそのように弟は考えているわけです。そして放蕩の限りを尽くし、食べ物を買うお金もなくなり、奴隷のように扱われて、飢え死にしてしまいそうになった時に、弟は父のところに帰る決心をします。そして、帰ってきてお父さんに言います。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」。弟は「資格」の話をしているわけです。

そして兄の方はお父さんが弟が帰ってきたために、祝宴を開いていることに対して、お父さんに不平を言います。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか」。なんの話をしているのかというと、兄もまた、弟のように「権利」や「資格」の話をしているのです。わたしは何年もお父さんに仕えているのだから、弟よりもあなたから愛される「資格」がある。友だちと宴会を開いた時に子山羊をいただく「権利」がある。弟は「自分には財産分与の権利がある」「自分には息子としての資格がない」と言い、兄もまた「父の子山羊を用いて宴会を開く権利がある」「自分には息子としての資格がある」と言います。

しかし、お父さんは権利や資格の話をしません。お父さんがするのは「愛」の話です。弟が帰ってくると、「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」のでした。お父さんは帰ってきた弟に対して、息子としての資格があるかどうかとは問いません。父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻したのでした。また兄が弟だけが贔屓されているという話をお父さんにした時も、お父さんはけげんそうに、「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。」と言いました。お父さんは権利や資格の話をしているのではなく、愛の話をしています。ですから、とてもけげんそうなのです。兄が不平を口にしているわけですが、兄は権利や資格の話をしているので、愛の世界に生きているお父さんには兄が言っていることがよく分からないのです。

神さまの愛がある世界に生きている私たち

イエスさまは「『放蕩息子』のたとえ」を話され、人々に言っておられるのです。「権利や資格ではなく、愛がある」、このことが大切なのだと。イエスさまの時代の人々もそうですし、また私たちもそうです。なにかと私たちは、権利や資格の話をするのです。「私はこんなにりっぱな人間だから、みんなから尊敬される資格がある」「私はこんなに一生懸命に働いているのだから、みんなの上に立つ権利がある」。あるいは「私は何もできないので、こんなところにいる資格がない」「私は何もしていないので、みんなと同じだけ食べる権利はない」。私たちはあまりに権利や資格ということに取りつかれていて、愛があるということを忘れてしまっているのです。

イエスさまは、神さまの愛について、極端なことも言われます。たとえばマタイによる福音書5章 43 節以下の「敵を愛しなさい」という表題のついた聖書の箇所です。マタイによる福音書5章 45 節にはこうあります。「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」。神さまの愛は悪人にも善人にも、正しい者にも正しくない者にも注がれる。それは、神さまが愛について資格を問うておられるわけではないからです。ふさわしいとか、ふさわしくないということが、神さまの愛が注がれることの前提ではないからです。

私たちは愛の前に、権利とか資格ということを問題にしがちですが、イエスさまは言われるのです。私たちに権利があるとか資格があるということが大切なのではない。神さまの愛があるということが大切なのだ。神さまの愛があり、神さまの愛が私たちに注がれている。それは私たちにそれを受ける権利があるとか、私たちにそれを受ける資格があるとか、そういうことではない。ただ神さまの愛があり、神さまの愛が私たちに注がれている。そのことが大切なのだ。

私たちには資格や権利にかかわらず、神さまの愛があるのです。神さまの愛が私たちに注がれている。私たちがどんな者であろうと、神さまの愛が私たちに注がれているのです。邪な思いをもちますし、人をうらやんだり、人を傷つけたり、自分勝手であったりします。そういうことであれば、私たちには神さまの愛を受ける権利や資格がないかもしれません。しかし、それでも私たちには神さまの愛が注がれています。私たちにとって大切なのは、私たちに資格があるとか権利があるとかではなく、神さまの愛が私たちに注がれているということです。

「権利や資格ではなく、愛がある」。私たちは幸いなことに、神さまの愛の世界に生きています。神さまの愛に感謝して、安心して歩んでいきましょう。

2021年6月2日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録